

## 諸井先生との思い出

山本 宣明

### 出会い

諸井勝之助先生に初めてお目にかかったのは、私が LEC 会計大学院に奉職して間もなくのことだったと記憶している。LEC 会計大学院は 2005 年 4 月に開設され、2006 年 3 月に青山学院大学大学院の博士課程を修了した私は、縁あって 2006 年 9 月から LEC 会計大学院に関わることになった。おそらくお会いしたのは LEC 会計大学院の研究科長室だった。言うまでもなく諸井先生は長く東京大学経済学部の教授として教鞭を執られ、その後、新潟大学経済学部を経て青山学院大学国際政治経済学部で 10 年以上に亘って教鞭を執られた。私が青山学院大学大学院の博士課程を修了したことを聞かれていた諸井先生は、そんな私に「今日は青学を卒業した方に会えるということで楽しみにしていました」と声をかけてくださった。そして、私の専門が管理会計であることもご存知であった先生は、原価計算について「山本君は素価基準を知っている？」ということから始まって、特別講義を 2 時間に亘ってしてくださった。管理会計が専門とは言え、原価計算については今から考えると恥ずかしい水準の知識しか持ち合わせていなかった私は、我が国の原価計算を作り上げてこられた先生の特別講義を贅沢にも堪能した。講義が終わった後も非常に興奮していたことを今でもよく覚えている。

その後、私は 2007 年 4 月から LEC 会計大学

院の教員として授業を持つなど本格的に活動することになった。諸井先生を筆頭に我が国の会計各分野を代表する実績を残されてきた先生方と実務家教員、事務局及び経営サイドとの調整を担いながら運営にも奔走することになった。当時は本学の初代研究科長を創設者である学長が兼務する形で務めていたが、研究科長は独立した形で専念してもらうのが望ましいということで、ほどなくして諸井先生が研究科長を務められることになった。諸井先生が最年長で私が最年少の専任教員ということで、事務局と共に様々な打ち合わせをするようになった<sup>(1)</sup>。また、諸井先生は「ファイナンスの全体構造」という基本科目を担当されていたので、授業補助も様々な形で携わらせて頂いた。授業が終わった後に大学院の近くにあった蕎麦屋で食事を共にさせて頂き、貴重なお話を何度となく伺った。

### 海軍経理学校と海軍主計士官

諸井先生は人と会われることを大変好まれ、相手に合わせて様々な話題を提供される対話の妙手だった。蝶、昆虫、花、植物、写真、オペラ、鉄道、山登り、旅行といった趣味に関する話題も豊富で感嘆することしきりだった。もちろん会計、原価計算、ファイナンスといった専門的な話題についても同様である。ところが、ほぼ毎回と言って良いほど出てく

る話題があった。それが海軍経理学校と海軍主計士官を巡るものだった。

諸井先生は東京帝国大学経済学部の大学生の時に海軍経理学校に入校された<sup>(2)</sup>。凡そ半年間の訓練期間と伺ったと思うが、その期間の記憶は鮮烈なものとして持たれていた。戦況が悪化している中での訓練は苛烈なものだったようである。そして、海軍経理学校を卒業された諸井先生は、海軍主計士官として宮崎に赴任され、宮崎で終戦を迎えられた。赴任して終戦までの間は期間としては短いものの、空襲中での物資輸送や終戦後の残務処理、現地でお世話になった方々との交流などを実に細かく記憶されていた。

私のような世代の者にとって、戦前・戦中の話は教科書ぐらいでしか学ぶことができない。何度となく諸井先生から昭和20年前後の話を伺えたことは、ともすると戦後で括っ

てしまう思考の境界を改めることになった。

## 「原価計算基準」

諸井先生と交流をさせて頂く中で私の専門に関して最も影響を受けたのは、原価計算に関する我が国の歴史である。一時期、「戦艦大和や武蔵の原価計算はどうなっていたのかね?」とよく問いかけられ、巨大個別原価計算を巡って様々なお話をしてくださった。調べてみると、我が国の原価計算は明治以来、造船を1つのキーワードに発達した経過が見て取れる。かなり早い段階で高度な個別原価計算が定着していたようである。諸井先生は、そのような我が国の原価計算実務の発達史に大きな関心を持たれていた。



戦後、東京大学に復学され特別研究生になられた先生は、会計学を専門とされ、なかでも原価計算を研究された。そして、それは我が国の会計が近代化する経過と軌を一にすることになった。「企業会計原則」や「原価計算基準」の策定に諸井先生は大いに関与され、

とりわけ「原価計算基準」については中心者だった中西寅雄先生のエピソードをよくお話し下さった。「前にも後にもあれほどの学者はいない」というのが諸井先生の評価だった。

「原価計算基準」は昭和37年に策定されたが、その内容は戦前も含めて我が国の原価計算研

究が結晶化されたものと言っても過言ではない。「原価計算基準」の策定に至る経過を現場で携われた諸井先生からすると、「原価計算基準」の改定を巡る議論には違和感を抱かずにはいられなかったようだった。徐々に原価計算を巡るお話は、当初の戦艦大和の個別原価計算から「原価計算基準」へと移るようになっていった。

2012年8月22日、LEC 会計大学院の共同研究室で諸井先生から「原価計算基準」についての特別講義を座談会形式で拝聴した。諸井先生は「原価計算基準」策定に至る歴史を振り返りつつ、その完成度の高さが十分に理解されない状況に危機感を持たれていた。そして、「原価計算基準」の改定ではなく、解釈の充実を図ることが望ましいというお考えを主張された。この座談会を契機に、私は「原価計算基準」の解釈研究を充実させるべく、関係各方面に働きかけるようになっていった。その後、様々なご縁を得て、『原価計算基準』を考える会」という研究会を開催することになった。

『原価計算基準』を考える会の研究会は非常に精力的に開催された。2013年12月25日のクリスマスに正式な第1回の研究会を行い、そこから2015年8月21日の打ち上げまで、毎月のように研究会を開催した。結果、その成果を書籍にまとめることを約した。

同年9月11日に日本原価計算研究学会の第41回全国大会が日本大学商学部で開催され、統一論題で諸井先生は特別講演をなされた。統一論題後の懇親会まで諸井先生は全て参加され、大変充実した面持ちで帰路につかれた。大会委員長のご配慮で諸井先生と共に専用車に途中まで同乗させて頂いた。車内で本当に良かったと仰っていたのが忘れられない光景となった。

## 高速道路

諸井先生は「原価計算基準」の策定と名著『原価計算講義』の発刊を区切りとして、その後、ファイナンスに専門を移された。今日のような資本市場が存在する訳でもなく、米国においても興隆しつつある状況の中で、いち早く時代の流れを察知して研究を始められた。原価計算で言えば特殊原価調査、管理会計で言えば設備投資の意思決定を中心とする資本予算の問題の発展としてファイナンスの研究を始められた。管理会計の延長線上にあるとは言え、思い切って大胆に専門を切り替えられ、しかもファイナンスの分野でも我が国の礎を築かれたことは驚くばかりである。諸井先生はそれらの成果を純粋に学問の探究として楽しまれていた。そして、よく「高速道路を行きなさい」とアドバイスをしてくださった。

高速道路とは、要するに急速に議論が発展する学問分野を指す。反対に尻すぼみしがちな、重箱の隅をつつくような議論は避けるべきとされていた。諸井先生と約12年間に亘って交流をさせて頂き、特に「原価計算基準」の解釈研究という大きな沃野を見せて頂いた者としては、この道を開拓して歴史的な連続性を持った原価計算の発展に尽力する所存である。また、具体的な高速道路として挙げて頂いた国際ビジネス・ファイナンスや国際管理会計の視座も常に意識していきたいと考えている。

## おわりに

振り返ると、諸井先生に出会って過ごさせて頂いた時間は、ちょうど先生の80代と90代ということになる。時々、先生は「私の80

代は LEC 会計大学院のお陰で大変充実したものになった」と仰っておられた。誠に有り難いお言葉であるが、同時に激動の 80 代と 90 代になったことを共に過ごさせて頂いた者として感じずにはいられない<sup>(3)</sup>。唯々、感謝しかない。率直なところ、諸井先生とこのような交流をさせて頂けるとは夢にも思っていなかった。諸井先生のお名前は修士課程で経営学を中心に学んでいた時に名著『経営財務講義』で拝見していた。しかしながら、まさか直接お話ができるとは思ってもいなかった。

人生とは誠に不思議である。

多くの LEC 会計大学院の関係者が理解するところとして、LEC 会計大学院は諸井先生がいらっしゃらなければ専門職大学院として船出することが難しかった。そういう意味では、諸井先生との出会いは先生に作って頂いたものと言えるかもしれない。幾度となく食事を共にさせて頂き、数々の思い出を築かせて頂いた<sup>(4)</sup>。先生との思い出を振り返りながら、今後の人生を精一杯、生きていきたいと思う。諸井先生、大変にありがとうございました。

### (注記)

- (1) 諸井先生が研究科長になられた当時は、LEC 会計大学院の設立母体である東京リーガルマインドの本社が大手町にあり、教授会である研究科委員会は大手町で開かれていた。その後、授業の行われていた水道橋で開催されるようになった。そして、研究科長として諸井先生が注力されたのは紀要の発行だった。紀要を充実させることが、LEC 会計大学院が大学院たり得る条件と考えられていた。その姿勢は研究科長を退かれた後も一貫して示され、様々な形でご支援を頂いた。現在まで LEC 会計大学院は紀要の定期発行を遵守し続けている。改めて考えると、紀要の定期発行は確かに大学院の生命線であり、諸井先生から重要な一点を見定めて集中する姿勢の大切さを教えて頂いた。
- (2) 一度、諸井先生に誘われて築地の海軍経理学校跡地の石碑を訪れた。その後、都営

バスで銀座に赴き、お茶をしたことも懐かしい思い出である。

- (3) LEC 大学の学部の改廃や LEC 会計大学院の認証評価対応を巡っては、大変な負荷がかかったと思われる。今思い出しても様々なことが混乱していた。2010 年度以降、LEC 会計大学院は体制を抜本的に改めて邁進したが、それを変わらず温かく見守って頂いたのは大変に有り難かった。ある時期は不定期、ある時期は定期的に東大などで懇談をして頂いた。思い返すと、積極的に先生の方からお声がけ頂き、常に柔軟な姿勢でご指導いただいた。その姿勢自体が学ぶべきものだった。

- (4) 東大の食堂（冬は牡蠣フライ、夏は鰻）や水道橋の蕎麦屋、神保町や学士会館内の喫茶店、銀座や赤坂でのランチなど楽しい思い出が幾つもある。